

(9) 小麦育種グループに加わって －最先端の機器に驚く－

私と小麦との係わりは、今から30年余り前、昭和43年（1968）に、北見農業試験場小麦科に転勤を命ぜられてからです。前任は馬鈴しょの育種で、小麦には殆ど触れたことのない、全くの素人でしたから、受け入れ側のマイナスを考えたりし、腹をくくって赴任したことが思い出されます。

いざ小麦育種の現場に入ると見ますと、農業形質の選抜に加え、品質検定項目の多さに驚き、当時としては、最先端と思える、初めて目にするこれら検定機器、装置…テストミル（試験用製粉機）、フォーリングナンバー、アミログラフ、ファリノグラフ、エキステンソグラフなどを、巧みなローテーションで、使いこなす先輩諸氏の仕事振り、奮闘振りは驚異でした。殊に製粉室での騒音・ゴゴゴガガガの中で、粉の流れに注意を払いながら、データ整理、成績の取りまとめまでしていましたから（ビューラーテストミル挽砕は、原粒2kgの製粉に45分前後かかります）…また、キャップの新品種育成に懸ける情熱の証、夜半まで点灯している庁舎二階・研究室の窓を眺めることが度々でありました。

当時の国内産小麦は、減少の一途をたどり、北海道も同様で、昭和47年（1972）の小麦作付面積は7,000ha台に落ち込み、自然消滅、安楽死するとのが騒音が聞かれたのは、ご承知の通りです。

このような小麦を取り巻く環境の中、マントバNo2、ASWなどの外麦に匹敵する良品質小麦育成への期待や、実需側からの要請が、強く求められていました。当然、育種担当者（場所）のプレッシャーは並大抵でなく、プレッシャーを品種育成の情熱に昇華し、ハードなスケジュールになっていたように思い出されます。

私の小麦育種の現場経験は、5か年と短い期間でありましたが、ムカコムギに続くホロシリコムギ、タクネコムギ、チホクコムギ、ハルユタカと、本道小麦の基幹になった品種の、育成過程の一端に触れたこと、そして育種家の育種目標をクリアする努力、焦り、決断などを目の当たりにし、多くを学んだ期間であったと思っています。

その後、品種育成のサポート側に回り、耐雪性に問題が残った、チホクコムギの道央多雪地帯への適応地域拡大を図る仕事は、かつてないきめ細かな現地栽培試験の取り組みを行い、この品種の育成に係わった1人でもあり、とくに強く印象に残っております。

また、現役を離れた今、幸運にも道央における小麦現地試験の、調査を担当する機会を与えられまして（町村の農業試験ほ）、北見農試及びホクレン農総研・両育成場所の系統－北見72号、北見春59号、HW1号（春よ恋）－に接することができました。これらの有望系統が奨励品種候補として、本年の試験会議で検討され、北海道種苗審議会の答申をを経て、新品種として登録されることを聞き及び、現役当時の興奮と期待感を思い起こしているところです。

早朝ウォーキングの途中などで、田んぼと並んだ小麦畑を眺め、この麦の育成に係わったことを秘かに誇らしく想い、気を良くしたり、時には捨て作りのような畑も目に入りましたが…これからは新品種の普及と新農業基本法・新たな麦政策の展開により、本格的な麦作りの小麦畑を眺められる期待など、感慨深いものを覚えます。

<上野 賢司>